

本論ではビザンティン美術における「聖母の眠り」図像の図像学的研究を、特に聖堂の内壁面に描かれた聖堂装飾を対象として行う。「聖母の眠り」とは、聖母マリアの死に関する伝承、或いはそれを絵画化した作品を指す。正教で大きく祝われる「聖母の眠り」は、聖堂内の壁面を壁画で埋め尽くすことが特徴のビザンティン聖堂装飾においても重要な位置を担っている。しかしながら、伝承そのものの先行研究に比較し、図像としての「眠り」は概論的な取扱いに留まっている。先行研究の少なさは作例が僅かであることが原因ではない。聖堂装飾に関して述べれば、^{イコノクラシス}聖像破壊運動以前の作例は遺らないものの、中期ビザンティン時代には十二大祭へ取り入れられたこともあり描かれる例は増大する。そして後期ビザンティン、ポスト・ビザンティン時代には描かれない方が例外的と言えるまでに頻出する。しかし、その図像は一見すると伝承を忠実に絵画化しただけのようで、しかもその表現はどの聖堂を見ても大差ないように感じられる。そうした図像学的な平凡さが、研究者の注意をさほど惹かなかつた理由とも考えられる。ゆえに、聖堂のモノグラフなどでも本図像は概説的な記述に終始し、議論の深まりを見せることはなかつたのである。

そこで本論では、改めて「聖母の眠り」図を図像学的に分析し、これまで看過されてきた問題点を検討する。その媒体は聖堂装飾を対象とする。聖堂装飾としての「聖母の眠り」は、イコンなどと異なり可搬性がないため地域的特質、図像伝播の問題等を考察するのに適している。また聖堂内の他図像と組み合わせた「聖堂装飾プログラム」を検討することにより、図像が信徒にいかに見られていたかという受容の問題も考えることが可能となる。こうした作業により、単に一図像の問題に留まらず、ビザンティン帝国の歴史的状況、当時の人々の心性にも迫ることを目的とした。

第1章では、第1節で7世紀のテサロニキ大主教ヨアンニスの説教を基に「聖母の眠り」伝承の概略を確認し、また第2節でビザンティン時代の代表作例を取り上げ図像学的基礎を確認し、今後の議論の前提とした。

第1節で取り上げたテサロニキのヨアンニスによる説教は、「眠り」の祝祭の重要性を述べた後、晩年のマリアの死の3日前より物語を始め、最後にはマリアの空になった墓についてまで述べる。他の教父の説教と比較すると、全体に占める語り手（ヨアンニス）の主観表明が少なく、登場人物の台詞と状況説明に徹している感がある。台詞を中心としたこの説教は、非常に演劇的と評することが出来るだろう。このような特性が、後の主教達の語りの素地になり得たことは想像に難くない。一方で、マリアの「眠り」の物語ながら、実際の死の場面は第12節に入ってから、かつ1節内でその語りは終わるなど、その力

点は必ずしもマリアの死だけに留まらないようにも見える。マリアとヨハネの絆、使徒同士の絆といった人々の関係性にも多くの節を割いている。

14 節で語られるマリアの遺骸についての言及も重要である。マリアの遺骸の行方については多くの議論があり、正教は教義としてマリアの肉体の「被昇天」は認めていない。この点、8月15日に「聖母被昇天」を祝うカトリックとは対照的である。しかし正教においてもマリアの肉体が天に昇ったことは、伝承としては語られ続けている。ヨアンニスの立場は肉体が天に昇ったことを示しはするが、積極的にその様を描写はしない。

第2節では現存作例中最も古いカッパドキアの岩窟聖堂壁画を始めとして、代表的な作例と共に構図、モチーフ等の図像学的基礎を確認した。時系列順に、a. 定型化以前、b. 定型化、c. 複雑化とその後、の三段階に区切り各段階の作例を考察した。a.はカッパドキアの7～10世紀にかけての3作例を見た。他地域には同時代の作例は遺らない。これらはいずれも8～9世紀に起こった^{イコン破壊運動}前後の「眠り」図がどのように描かれていたかを示唆するように思われるが、いずれも同じ主題を扱いながらその描写は独特で、他の作例との比較考察は難しいものであった。b.は中期ビザンティン時代の作例が中心となった。この時期にはっきりとした図像の「定型化」が起こる。筆者は「聖母の眠り」図像の定型を以下の通り定義した。1. 左右対称の構図を有する。2. 画面中央に水平に設置されたベッドとマリア、その背後に魂を受け取ったキリストが立つ。3. 周辺には十二使徒と主教、マリアと晩年を共に過ごした処女たちが並ぶ。これも壁面の制約がない限り左右均等に配される。4. 特にヨハネ、ペテロ、パウロの3人の配置は固定されており、ヨハネはマリアの胸元、ペテロは頭の側、パウロは足下の側に立つ。ペテロは振り香炉を持つ。この定型は、c.の複雑化後も図像の「核」として保持され続け、その系譜は現代にまで至る。

後期ビザンティン時代以降はc.複雑化とその後に分類される。聖堂内の定位置である西壁を大胆に使った大構図の図像が生み出された。セルビアのソポチャニ修道院やマケドニア、スタロ・ナゴリチャネの聖ゲオルギオス聖堂がその代表と言えよう。一方その構図にはしばしば伝承中の付加的なエピソードが図像化され描き加えられる。これは与えられた壁面の都合により取捨選択されたと思われるが、そのような消極的理由だけでは解釈できないモチーフもあることが確認できた。さらに、ある種懐古的とも言えるシンプルな構図を採る作例もまた確認された。左記の問題は続く章で改めて検討することになった。

第2章では地域を限定し、その中で「聖母の眠り」図を総括することで図像の特質を浮かび上がらせることを目的とする。第1節ではトルコ・カッパドキアが、続く節でクレタ島がそのフィールドとなる。

時代、地域ともに広大な範囲に互るビザンティン美術であるが、各地に残された遺物は

必ずしも多いとは言えず、特に首都コンスタンティノポリス（現トルコ・イスタンブール）に残る壁画を描いた聖堂は、断片を除いて僅か三聖堂に過ぎない。より古いものに関して言えば、^イ聖^コ像^ク破^ラ壊^ス運^ム動^トによっても多くの美術作品が失われた。本論で取り上げる聖堂装飾については、帝国の中心よりも周縁に残るものが多い結果となる。周縁部の美術制作には、中央からの図像伝播と共に、地域での独立した（或いは孤立した）図像の展開があったことは容易に予想される。「保持されたもの」と「変化したもの」を通じて、図像がどのようにビザンティン人に見られていたのかを考えた。

首都コンスタンティノポリスを「中央」とし、帝国第二の都市であったテサロニキの在るギリシア、バルカン半島南部を中央に近い領域とするなら、東地中海の島嶼部やカッパドキアは周縁、辺境に位置付けられる。歴史的文脈では、カッパドキアは11世紀中頃までは軍事上重要なテーマが設置され、また修道文化も栄えた土地であった。しかし1071年のマラズギルト（マンツィケルト）の戦いでの敗北以降、小アジアからビザンティン勢力は一掃された。このような状況が、美術作品にどのような影響を与えたか。

まず筆者のフィールドワークにより写真資料を得ることが出来た聖堂を中心に、カッパドキアの現存作例を概観した。第1章で取り上げた作例を含め、カッパドキアでは「眠り」の描写により古い構図が維持されていることが確認できた。聖堂内の配置も、他地域とは異なるものであった。特に13世紀に至る作例は、「眠り」図が他地域、さらに言うなら中央で起こった図像の変遷が見られないことを示す。これは、カッパドキアが他地域の情報伝播を受けていなかったと考えられ、すなわちマラズギルト以降、カッパドキアがビザンティン本国から孤立した状況にあった証左と言えよう。

第2節ではクレタ島の作例を、I・スパタラキスの先行研究を基に検討した。本島に残るビザンティン聖堂は、圧倒的多数が後期ビザンティン期（14～15世紀）、或いはポスト・ビザンティン期（1453年以降）に属するものである。後期以降はヴェネツィアに支配された期間が長い、聖堂の図像はビザンティン系のものを長く描き続けている。一つの島とはいえ、ある種の傾向を見出すことの出来るサンプル数を確保することは容易ではない。しかし本島においては、スパタラキスが壁画の残る聖堂を纏める研究を著し、その全容を明らかにしつつある。そこで本論では、この調査を基に、同地の「聖母の眠り」図像について解釈を行うことを試みた。スパタラキスの著作においては、後期ビザンティン期までのクレタに残る聖堂を、地域ごとに総ざらいしつつ、聖堂の建築・図像の基礎情報の報告がなされる。未だ刊行中でありクレタの全てを納める訳ではないが、そのサンプル数は百を超え、またポスト・ビザンティン期を殆ど含まないことで時間軸が広がり過ぎず、各聖堂の影響関係が見えやすいことが期待された。一方で各報告は記述的、概説的に留まって

いる。そこで「聖母の眠り」という一図像を軸に、新たな知見を求めるのが本節の目的である。

具体的な方法として、まず「聖母の眠り」が描かれた聖堂を取り出し、その簡潔な記述を行った。聖堂内の情報はいずれもスパタラキスの調査結果に従う。記述する内容は1. 聖堂の構造、2. アプシスに描かれた図像、3. 西壁に描かれた図像、4. 「聖母の眠り」の配置、5. その他主に「眠り」についての筆者の所見を記す。1については、殆どの聖堂が単廊式バシリカのため、その場合は特に記さない。2～4は、聖堂装飾の定型としての「聖母の眠り」との比較を行うものである。ビザンティン聖堂はアプシスに聖母子を描くことが最も多く、また西壁に設置される扉口上部が「聖母の眠り」の定位置である。東側に幼児キリストを抱く聖母マリアが、西側に赤ん坊の姿をしたマリアの魂を抱くキリストが立つことによって、形態的類似と意味的対照が生み出されるのが、聖堂装飾プログラムの定型となっている。この定型が維持されているのか、逸脱しているならばその理由は何かを考えた。結論を述べれば、クレタの「眠り」は、通常の聖堂装飾プログラムと異なる配置を多く採る点が特殊である。それは「眠り」の配置が定型化する以前の様相を残すものであり、また本来のプログラムで呼応すべきアプシスの「聖母子」という図像を欠いたため、定型の束縛が弱かったものと考えられる。先行研究ではクレタ内で解釈が完結しており、他地域との比較が積極的になされなかったため、その特殊性が十分には明らかにされてこなかった。カッパドキアと同じく、周縁部たるクレタにはより古い図像、より古いプログラムが保存され、また特に島という地理的に孤立した環境により、手近な作例を参考にしながら作品を描き続けることになったのだろう。本節ではそのような可能性を具体的な数値により示すことができたものとする。

第3章では「聖母の眠り」図に現れる個別のモチーフについて個別に論じた。第2章では地域を大きな切り口として、「定型」から離れた図像を考察したが、本章で取り上げるのは定型を維持している図像が中心となる。一方で、子細に観察すれば特定のモチーフの取捨選択、類例のない人物表現など、特殊性を指摘できる作例も存在する。そういった作品も、先行研究ではいわば典型的な「聖母の眠り」図として看過されてきたように思われる。本論ではビザンティンの画家達が、定型を維持するというビザンティン美術の枠組みを守りながらも行った創意工夫や、時代背景から受けた影響を「聖母の眠り」図の中に見出そうとするものである。

第1節では、ビザンティン聖堂に描かれた「聖母の眠り」図像を対象として、十二使徒がどのように描かれたかを考察する。聖堂装飾の一部主題に登場する十二使徒は、聖書に記されたキリストの高弟としての十二使徒と必ずしも一致しない。一方キリストと十二使

徒を描く主題は、聖堂内でも特に重要な位置を占めている。「聖母の眠り」にも、マリアの許に集った十二使徒が描かれる。まず図像化された十二使徒の構成を先行研究から確認し、マケドニア、ヴァロシュのスヴェティ・ニコラ聖堂を例として「聖母の眠り」にそれを敷衍できるかを見る。その上で十二使徒図像としての「聖母の眠り」の意味を考えた。その結果、聖堂装飾における十二使徒が主題となる図像は多くないが、その「眠り」図はその一つとして重要性を持つことが明らかになった。さらに「12」という象徴的な数字を敢えて変更した作例を考察した。パレルモのラ・マルトラーナで使徒は13人、コンスタンティノポリスのコーラ修道院では11人となった使徒を、観者はいかに見たのか。そこにはいずれも献堂者の、ささやかな表現ながら強い想いが隠されていた。ラ・マルトラーナでは献堂者とその主君が聖母マリアの「眠り」という救済を示す奇跡の場に居合わせる。コーラでは首都から失われたマリアの腰帯という聖遺物への想いが、トマスへの腰帯授与エピソードの示唆により表されていたのである。

第2節ではビザンティン美術の担い手として稀有な、サインを記すことにより名を残した二人組の画家ミハイルとエウティキオスの描いた「眠り」について考察した。二人組は13世紀末からおよそ四半世紀にわたる作例を追うことができること、それらがビザンティン聖堂壁画のなかでも優品と言ってよい出来であることなど、注目すべき点が多い。しかし現存する6つの聖堂のモノグラフの刊行は遅々として進まず、画業の体系的研究は不十分である。本論では二人組の活動を「聖母の眠り」図像を通して考察した。彼らの手掛けた聖堂にも全てに描かれており、その画業を追うに最適な図像の一つと考えられたからである。

考察の結果、特に各作例には西欧の影響が強いことが認められた。具体的には「聖母被昇天」と「ユダヤ人イエフォニアス」の登場である。8月15日を「聖母の眠り」として祝う正教に対して、カトリックでは「聖母被昇天」を祝う。正教では聖母被昇天を正式な教義として認めていない。にも拘わらず、二人組はその現存最初の作であるオフリド、パナギア・ペリブレプトス聖堂において、既にモチーフとして取り入れているのである。

「被昇天」が「眠り」に多く描かれるようになるには、ポスト・ビザンティン期を待たねばならない。ポスト・ビザンティン期はイコンにおいてルネサンス風のスタイルを持つものが現れるなど、様々な点で西欧の影響が無視できない時代である。「被昇天」もまた西欧的、カトリック的であり、ポスト期に姿を現すことは不思議ではないが、その先鞭をつけたのが二人組であったと言える。「ユダヤ人イエフォニアス」については第3節で詳しく考察したが、これも西欧の影響の強いモチーフであり、ポスト期までは頻出しないものであった。スタロ・ナゴリチャネの聖ゲオルギオス聖堂のように、特異かつ追随作を生

まなかつた作例もある。ビザンティン美術史に名を残した二人組は、「聖母の眠り」図像においても際立った個性を示していることが明らかとなった。

第3節では「ユダヤ人イエフォニアス」エピソードの表現について考察した。ユダヤ人のステレオタイプの容貌である高い鉤鼻のようなイメージは、ユダヤ人を貶める目的で描かれた種々の図像によって形作られ、現代まで広く共有されるに至っている。しかしビザンティン美術においては、明確に反ユダヤ的な意識をもって描かれた図像はほぼないと言ってよい。「眠り」図に描かれた手を切断されたユダヤ人の像は、その意味で例外的な存在であり、明らかな反ユダヤ的イメージであると言える。さらに、ユダヤ人モチーフの登場は、説話の単なる絵画化にとどまらず、壁画が描かれた当時の反ユダヤ的な思想に基づくものだと言筆者は考える。聖母の臨終に関するイメージとしてはカトリック圏の「聖母被昇天」が著名であり、「眠り」図像自体があまり知られたものではない。その中の一モチーフに過ぎない「手を切断されるユダヤ人」は、反ユダヤ的図像としても大きな関心を持たれなかった。しかし反ユダヤ主義というヨーロッパの歴史を考える上で少なからぬ重みを持つ事象に関わる図像であり、本モチーフを考察することは美術史的だけでなく、ヨーロッパ史的な観点からも有用な作業であったと言える。結論を述べれば、「眠り」図へのユダヤ人の登場は、1215年の第4ラテラノ公会議を契機として急速に強まった西欧の反ユダヤ主義の潮流と軌を一にするようであった。ビザンティン帝国史上、際立った反ユダヤ主義的活動は見られなかったと考えられるものの、福音書で既に語られるユダヤ人への敵意は、西欧で燃え上がる反ユダヤ主義によって強められたことが「眠り」図の中に読み取ることができたのである。

第4節ではマケドニア共和国のポロシュキ修道院に遺る「眠り」図について考察した。この「眠り」図は定型では直立不動の姿勢を採るキリストが、身を屈めてマリアに口づけをするという「特異な」作例である。しかし先行研究ではただ「特異である」という点のみが指摘され、その意義、起源については追究されていない。この表現が先行研究の対象とならなかったのは、ドラマティックな表現のみに注目がなされ、図像と説話の典拠、聖堂の献堂背景といった周辺情報を統合して検討されることがなかったためと思われる。本節では図像の特異性を考察すると共に、「聖母の眠り」において感情表現がどのように扱われているのかを整理し、「定型の踏襲」に終わることのなかったビザンティン美術の一側面を明らかにした。「眠り」図ではマリアの死について強く哀しみは表出されていないものの、ポロシュキのマリアとキリストは「トレノス」のような図像を想起させたであろう。一方「眠り」のエピソードは、母子の愛情の帰結という側面を持っていた。そして「眠り」図では、親と子、生と死、幾つもの対象が重なり、反転しながら意味を形作る。

ポロシュキで特異な表現によって「母子の愛情」を強く打ち出すことになったのは、献堂者マリアと先立った息子ヨヴァン・ドラグシンの存在が大きいと思われる。敢えて定型を大きく崩し、そのため追隨作を生まなかった本作は、しかし献堂者の存在を考えると「眠り」図の一側面を表した成功例と見なすこともできるのである。

第4章では本論の総括として、聖堂装飾プログラムにおける「聖母の眠り」図像の意味を問うた。特に着目したのは、聖堂という空間内で信徒がどのように動き、いかにして図像を眺めたのか、という点である。結論から述べれば、「最後の審判」図と結び付き、強い終末論的意味と信徒への救済を示すことになったのである。

第1節、第2節では、本章の対象となるギリシア、カストリアのパナギア・マヴリオティッサ修道院主聖堂について概略を述べた。中期ビザンティン時代の現存作例は多いとは言えないが、本聖堂では本堂に「聖母の眠り」、玄関廊に「最後の審判」がそれぞれ遺る貴重な例となる。

第3節、第4節では、聖堂の壁画配置と信徒の動きを鑑み、「聖母の眠り」と「最後の審判」が強いメッセージ性を持っていたことを明らかにした。まず玄関廊に描かれた「最後の審判」は、聖堂を訪れた信徒に審判の恐ろしさ、自らが救われるかどうかの不安を抱かせる。「審判」は正しき信仰者には救済をもたらすが、聖堂に描かれた責め苦に苦しむ人々は信徒に恐怖を覚えさせたことだろう。その後身廊に進み、祈りを終えた信徒の前に、出入口口上部に描かれた「聖母の眠り」が現れるのである。キリストに抱かれたマリアの魂は、教父の説教によれば正しき者の魂もまた重ねることの出来る存在である。このように、教会を訪れた人間に「救済」と「応報」を示すのが、「聖母の眠り」と「最後の審判」の作り出す装飾プログラムであった。

以上4章をもって、本論文ではビザンティン聖堂装飾における「聖母の眠り」図について、基本資料を提供しつつ多角的に考察した。先行研究で等閑視されてきた図像のモチーフが持つ複雑な背景、聖堂装飾プログラム中での重要性といった美術史的な指摘だけでなく、帝国の歴史的、地理的問題、また当時のパトロン、信徒の心性に迫ることが出来たものとする。